

はしがき

2002（平成14）年に策定された「障害者基本計画（第2次）」は、障害者福祉政策を施設から地域へと転換させたと言われている。1981（昭和56）年の国際障害者年以降、ノーマライゼーションを施策推進の理念に据えて施策の整備、充実を図ってきているはずだが、20年後に改めてそのような宣言を行わなければならないことに対して筆者は疑問を持った。知的障害者の暮らしの場の現状をみると、他の障害種別に比べて入所施設で生活している割合が高く、かつ人数も多い。そのような理念と実態が乖離した現状を問題と捉え、それを解消するための研究に取り組むことにした。本書は、その成果として刊行したものである。

本書は、本論に該当する第1章から第5章と序章、終章の計7章で構成されている。そして、各章を次のように位置づけている。序章では、研究の課題を提示し、本書の全体像を示す。第1章から第3章は、戦後の知的障害者福祉施策の歴史的検証を行い、施策展開の特徴と施策策定の構造を明らかにする。第1章は、戦後の知的障害者福祉施策の前史から制度の改変を経て、現在の制度に到達した時期まで取り上げ、展開の特徴を把握する。第2章と第3章は、コロニー政策の起点に当たる国立コロニー開設の時期に焦点を当て、施策策定の構造を明らかにする。第4章と第5章では、今後の知的障害者福祉施策の展望を得るための検討を行う。第4章では、ノーマライゼーションが実現している海外の国を取り上げ、施策展開の特徴を示し、教訓と課題を導き出す。第5章は、コロニーにおける地域生活移行の取り組みを検証し、特徴と課題を提示する。そして、終章において、これまでの議論を踏まえ、理念を実現するための課題を述べ、研究の総括を行う。